

研究ノート

おお牧場はみどり：「若人らが歌うのか」か「若人らが歌の力」か

守 一雄

A Preliminary Study of the Lyrical Changes in the Song "Oh, Makiba wa Midori":
Identifying Potential Reasons for These Changes

MORI Kazuo

要 旨

NHK『みんなのうた』は今年(2021年)、放送60周年を迎えた。その記念すべき1曲目は『おお牧場はみどり』(チェコスロバキア民謡、訳詞中田羽後)である。その歌詞の2番には「若人らが歌うのか」という部分があるが、この部分は50年前の1960年代には「若人らが歌の力(うたのちから)」となっていた。この歌詞の変遷を過去の資料で探り、歌詞全体の視点分析から「歌の力」とする方が相応しいこと、しかし現代では「歌うのか」が受け入れられやすい理由などを論じた。

キーワード

NHK みんなのうた 視点分析 歌詞の変遷 労働歌

目 次

- I. はじめに
- II. 視点の統一性に基づく分析
- III. 歌詞の変遷の諸要因
- IV. まとめ

注

文献

I. はじめに

NHK『みんなのうた』は今年(2021年)放送60周年を迎えた。その記念すべき1曲目は『おお牧場はみどり』(チェコスロバキア民謡、訳詞中田羽後)である。その歌詞は歌詞検索すると以下であるとされている。原曲がチェコスロバキア民謡であることから、「訳詞」とされるが、どうやら原曲の歌詞とは全然違うものようである。ただし、ここでは、この点については深入りせず、中田羽後による「作詞」と考えることとする。

おお牧場はみどり 草の海 風が吹く
おお牧場はみどり よく茂ったものだ ホイ
※雪が融けて 川となって 山を下り 谷を走る
野を横切り 畑うるおし 呼びかけるよ 私に
ホイ

おお聞け歌の声 若人らが歌うのか[下線加筆]
おお聞け歌の声 晴れた空の下 ホイ
※繰り返し

ああ仕事は愉快 山のように積み上げろ
ああ仕事は愉快 みな冬のためだ ホイ
※繰り返し

1. 約50年前は「若人らが歌の力」?

今年70歳となる私には、この歌詞の2番に当たる部分を「若人らが歌の力(うたのちから)」と歌って

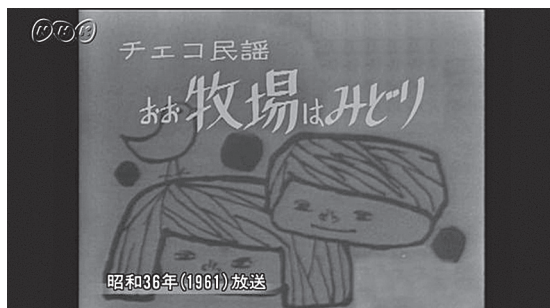


図1. NHKアーカイブスより 『みんなのうた』「おお牧場はみどり」
(https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009010082_00000)

いた記憶がある。それは中学生の頃だったから、1964年から1970年くらいのことである。今から50年くらい前ということになる。インターネット検索をしてみると、わずかではあるが、同様の指摘をしているページに行き着く^{注14}。また、「歌の力」という歌詞が書かれた楽譜も見つかる^{注5}。やはり、50年くらい前には、この歌の2番は「歌の力」という歌詞だったのである。もっとも、「歌の力」だったという資料はきわめて少なく、個人サイトへの匿名での書き込みや、小さな音楽サークルのものに過ぎない。主要なメディアや大手出版社のサイトにそうした記述は見つからない。

ウェブ検索をさらに進めると、池田小百合(2008)¹⁾による「納得童謡・唱歌」というウェブページにこの「おお牧場はみどり」を取り上げた箇所が見つかった。池田は、「歌うのか」だけでなく、歌詞の他の部分にも細かな変遷があったことを資料に基づいて明らかにしている。池田によれば、1955年発行の歌集『青年歌集(第四篇)』²⁾、1956年のNHKラジオ放送、1963年発行の歌集では「歌うのか」となっている。それが、『NHK みんなのうた』第3集(1965)では「うたう力」となり、その改訂版29刷(1974)では歌詞は「うたうのが」となっている。池田は音楽の教科書に載ったものも調べ、1969年の教育出版『新標準音楽6』(小学校6年生用)では「うたうのか」、その後の1995年の教科書でも「うたうのか」であったことを確認している。一方、うたごえ喫茶として有名だった新宿の「ともしび」の歌集『灯歌集』(発行年不詳)には「歌う力」となっていること、そしてその理由として「二番の歌詞は、労働する若者の力強さを歌って(いること)」が書かれていることも見つけ出している。しかし、「歌の力」という歌詞についての言及はない。

この池田の調査結果から、謎は一層深まる。当初は「50年くらい前には『歌の力』だったものが、いつしか『歌うのか』に変わってしまった」と考えていたが、どうもそうではないらしい。それは、1955年発行の歌集にも「歌うのか」と書かれていたからである。となると、60年以上前には「歌うのか」だったものが、50年くらい前には何らかの理由で「歌の力」になり、さらに現在はまた「歌うのか」に戻ったということになる。さらに、そうした中で「歌う力」という歌詞だったこともあるわけで、同時期に2つ以上の歌

詞が並行して歌われていた可能性もある。一番最近のものでは、合田(2006)³⁾に「歌のちから」とした歌詞が掲載されている。

飯塚書店から発行されている『緑の歌集』⁴⁾(1959)には編者が明記されていないが、これに掲載されている「お、牧場はみどり」(p.29)では「歌の力」となっている。上述の「のびの〜び倶楽部ーヴァーチャルうたごえ喫茶のび」のインターネット掲示板^{註4)}にもこの歌集と思われる『緑の歌集』についての記載があるが、それによれば、1962年版と1964年版では「歌の力」であったが、1976年版では「歌うのか」となっているという。これらが同じ歌集であると考え、同じ歌集でも年によって変わったということである。

2. 歌詞が変わることはよく起こる

竹内(2009)⁵⁾には、100の唱歌・童謡についてのいろいろなエピソードが紹介されている。それを読むと、唱歌や童謡の歌詞が変わることはよくあったことようだ。歌われているうちに、歌詞が変わり、それを作詞者が受け入れて、元の歌詞が「正式に」変更になった例も紹介されている。戦前や戦中には、文部省唱歌が戦意高揚のために改変され、それが戦後にまた元に戻ったという例も多いという。例えば、『もずが枯れ木で』という歌の作詞者はサトウハチローであるが、この歌は元々『もずよ泣くな』というタイトルで、歌詞の最後も「もずよ寒いとなくがよい」ではなく「もずよ寒くも泣くでねえ」と逆だったという。作詞者不詳のまま「茨城県民謡」とされて歌い継がれているうちに、原作とは変わってしまったのである。ところが、その後に作詞者がサトウハチローであることが認められてから、サトウ自身が「今のものではかわらない」と語り、現代の歌詞が確定したのだそう。その他にも竹内(2009)には、戦前や戦中に文部省唱歌が戦意高揚のために改変され、それが戦後にまた元に戻ったという例もいくつか紹介されている。

この本の100番目に『おお牧場はみどり』が収録されている。しかし、この歌が「うたごえ運動」の提唱者であった関鑑子編集の歌集『青年歌集(第四篇)』²⁾(1955)が初出であることが記されているが、歌詞は「歌うのか」となっており、その部分の変遷

についての記述はない。ただし、後述するように、「うたごえ運動」との関わりが大きかったことは、歌詞の変遷に関わる重要な情報である。

Wikipedia日本語版⁶⁾には、原曲とされるチェコスロバキア民謡での歌詞との詳細な比較など、かなり詳しい記述が書かれているが、日本における当該部分の歌詞の変更についての記載はない。

3. 作詞者の中田羽後について

本稿ではこうした過去の資料検索は今後の作業として保留することにする。なお、過去の資料を調べるまでもなく、作詞者に問い合わせるのが最も手取り早いことなのだが、作詞者の中田羽後(図2)は1974年に亡くなっている。上述のWikipediaによれば、中田羽後は「日本の牧師、音楽伝道者、福音歌手、詩人、作詞家、作曲家、編曲家、言語学者、指揮者、聖歌の編者」であるという。単なる作詞家ではなく、言語学を含む幅広い教養の持ち主であったようである。(なお、Wikipediaには著作権に関する注記として、「中田羽後・馬場祥弘・藤田敏雄・加茂六郎による訳詞」と書かれているが、本稿では中田の作品として論を進める。)

II. 視点の統一性に基づく分析

このように広く公式に行き渡っている歌詞「歌うのか」と、私の記憶に基づく歌詞「歌の力」との違いがどのように生じたのかは不明であるが、本稿では、



図2. 中田羽後師(荻窪栄光教会ウェブサイトより <https://eiko-church.com/guide/history/nakata-ugo>)

歌詞の解釈を通して「歌の力」が歌詞としてより適切であることを主張したいと思う。それは、この歌詞がどのような視点で書かれたものかを考えることで論証できると考える。

1. 「若人らが歌うのか」では視点が統一できない

まず、「若人らが歌うのか」という歌詞では矛盾が生じることを述べたい。この歌の1番の歌詞からは、この歌が「牧場にいる誰か」の視点で書かれていることがわかる。「牧場に草が茂っていることを眺め、その草原を風が吹いていることを体感している誰か」である。次に続く繰り返し部分の歌詞（「雪が融けて川となって」以下）では、やや視点が俯瞰的になって、情景の中に「自分自身」を置くような視点になる。そして、「牧場を含む大地を流れる川が大地を潤していること」が歌われる。

問題となる2番の歌詞は、「おお聞け歌の声」と始まる。次の「若人らが歌うのか」と合わせて考えると、ここでの視点は「歌を聞いている誰か」であると考えるのが自然である。「牧場にやってきた誰かの耳に、若人らが歌っていると思われる歌が聞こえてきた」と解釈できるだろう。

ところが、この解釈は3番の歌詞によって否定される。なぜなら、3番の歌詞は「ああ仕事は愉快」で始まり、視点は牧場で働く人のものとなるからである。その後に続く歌詞「山のように積み上げろ」や「みな冬のためだ」から、刈り取った牧草を（おそらく干し草にした上で）山のように積み上げる仕事をしていることが想像できる。ここでは明らかに「牧場で働く若者」の視点となる。（ちなみに、NHK『み



図3. ピッチフォークでの牧草刈り作業(西田進氏「アルプスハイキング(2)―ヴァリス山群」より)<http://www.nishida-s.com/main/categ1/alps-2/alps-2.htm>

んなのうた』での白黒テレビ映像(図1)でも、牧場で働く人々の実写が使われている。)

ここで矛盾が生じる。それは、この歌が労働歌で、「牧場で働いている若者自身の視点」で書かれたものならば、「若人らが歌うのか」という部分の歌詞とマッチしないからである。牧場で働いている自分もその一人として歌っているのに、他人事のような歌詞になってしまう。自分が歌っているのであるから、「誰が歌っているのかを疑う余地」がないはずである。

2. 「若人らが歌の力」なら一貫した解釈ができる

一方、「若人らが歌の力」という歌詞ならば、矛盾は生じない。この歌の主人公である「牧場で働く若者」は、この歌を歌いながら刈り取った草を積み上げる作業をしている。今でこそ、こうした作業は草刈り機をはじめとする機械によって労せずに行われるようになっているが、昔は草刈りもその後の積み上げも全て手作業だったわけで、相当の重労働だったはずだ。若者であっても、身体的にはきつい仕事だったろうが、そうした時にこそ、歌うことで力が湧いてくる。だからこそ、「歌の力」なのである。そして、一緒に働く仲間たちの歌声もまた労働意欲を増す力となっているはずである。つまり、この歌は「労働歌」であると考えるのが妥当である。もちろん、この解釈でも1番の歌詞は矛盾しない。この歌の「主人公」が牧場で働く若者であったとしても、その働く若者の視点から牧草が生い茂る牧場を眺めているものと解釈できるからである。つまり、この歌が「労働歌」であるという前提で捉えると、1番から3番までが一貫した視点で矛盾なく解釈できるというわけである。

3. 「若人らが歌の力」の格助詞「が」の解釈

文法的な解釈でも「若人らが歌の力」という歌詞の成り立ちに不都合はない。「若人らが歌うのか」の「が」は主格であり、歌う主体が若人であることを示している。一方、「若人らが歌の力」の「が」は「所有格」になる。この「が」は「の」に置き換えが可能である。「若人らの歌の力」としても意味が通る。

ただし、2つの所有格をどちらも「の」にしてしまうと、「若人らの歌」の「力」か、「若人ら」の「歌の力」かの2つの解釈が可能となってしまう。「若人らが歌の力」ならば、「若人らが歌」の「力」と一義的になる。これは「我が国の将来」と同じ構造となっている。「我が国」の「将来」であって、「我」の「国の将来」ではない。

このように「が」を所有の意味で使うのは、古文の場合か、古文の時代からの成語(慣用表現)の場合だけで、現代日本語では「の」を使う。「我が国(わがくに)」とは言うが「私が国(わたしがくに)」とは言わない。それは、一人称の「我(わ／われ)」は古語であるからである。逆に言えば、現代語の一人称の「私」では「が」は使われない。「若人らが歌の力」という歌詞はこの観点からも齟齬を起こさない。「若人ら」という表現は古語に近いものだからである。「若人」も複数を示す「ら」も現代語でも使わないわけではないが、爺くさい。現代語なら「若者たち」となるだろうし、そうであれば「若者たちの歌の力」となったはずである。

このことは、「若人らが歌の力」という歌詞が不自然ではないことの論証ではあるが、「若人らが歌うのか」が不適切であることまでは言えない。「若者たちが歌うのだろうか」とする方が自然な現代語となるが、それでは音符に対して字余りとなる。また、中田羽後自身が1896年生まれであり、「若人」という表現を普通に使っていた世代なのかもしれない。(今の若い人たちは「若者」という言い方さえしないだろう。70歳の私の感覚では「若者」は「現代語」であるが、現代の若者たちは「古語」と思っているかもしれない。ちなみに「ヤング」は「古語」ではなく「新語」だったけれど、今は「死語」になってしまった。)

Ⅲ. 歌詞の変遷の諸要因

では、歌詞の変更がなぜ生じたのだろうか。これは冗談のようなのだが、「文字面が似ていること」による些細な転写ミスだろうというのがここでの推測である。これは、上述の「アコーディオン好きの徒然日記(2)」^{註1}というブログに書き込みをしたMR.BON氏も同様の推測をしている。馬鹿馬鹿しいものだが、誰でも思いつくようなものだからである。以下では、補足説明を加えながら、この推測を

詳しく述べる。

1. 文字面の類似説

NHK『みんなのうた』でこの歌が広く知られるようになったのが1960年代である。当時はまだパソコンもワープロも無い時代であり、基本的に手書きの時代であった。「書き写す」という作業も文章をコピーしてそれをそのままペーストするのではなく、目で見えた文字を別の紙に手で書くという行為がなされていた。その際、「歌うのか」と「歌の力」は文字の形がよく似ているため、転写ミスが起こりやすかったと想像できる。まず「歌」と「の」は両者共通である。またひらがなの「か」はカタカナで「カ」と書かれたかもしれない、それは手書きでは漢字の「力」と同じ形となる。ひらがなの「か」のままだったとしても、点がなければ「カ」に見える^{註6}。となると、余計なのは「う」だけである。ここで日本語における送りがな表記法の不統一が関わってくる。現代送りがなの原則は「活用する部分を送る」である。そこで、「歌う」「歌わない」「歌おう」と送るのが普通である。しかし、送りがなは省略されることがある。例えば、「問い」や「答え」は「問」や「答」とも書く。また、漢文の読み下しでは漢字に送りがなを補って読む。例えば「祝卒業」は「卒業を祝う」と読む。とすれば、「歌」だけで「歌う」と読むことができるわけである。つまり、「歌うのか」は「歌のか」とも書かれた可能性が十分あり、カタカナなら「歌ノカ」となる。ここから「歌の力」となってしまったのだろう。

2. 時代背景の要因

しかし、単なる「転記ミス」だけではない他の要因もあったはずである。ここでは推測に推測を重ねることになるが、1955年には「歌うのか」だった歌詞が、1960年代には「歌の力」となった背景を考えてみたい。そのヒントは、池田(2008)の見出した『灯歌集』では「歌う力」となっていて、その理由が「労働する若者の力強さを歌って(いること)」とされていたことにあると思われる。この歌が、労働を賛美する歌として「うたごえ運動」などでよく歌われるようになり、上述の「視点の統一」からも「歌の力」がより適切であると考えられたのではないだろうか。

そうした背景のもとで、「字面の類似から」当該箇所が「歌うのか」ではなく「歌の力」なのだと考えた人がいたのかもしれない。この歌を「労働歌」と考えれば、「歌の力」とする方が受け入れやすいからである。

関(1955)が編集した『青年歌集(第四篇)』では「歌うのか」であったことはここで重要なポイントとなる。なぜなら、この関こそが「うたごえ運動」の創始者とされているからである。関の果たした役割を考慮すると、以下のような2通りの新たな疑問が生じてくる。「うたごえ運動」の創始者だったならば、なぜ最初から「歌の力」としなかったのだろうか。あるいは、「うたごえ運動」の創始者だったからこそ、自分が最初に紹介した歌の歌詞を変えることができたのだろうか。

3. なぜ「歌うのか」に戻ったのか

ところが、前述のように、この「歌の力」という歌詞は、ほどなく元の「歌うのか」に戻ってしまうことになる。それはなぜだろうか。その理由は以下のように推察できる。もちろん、中田羽後の元々の作詞したものが「歌うのか」であったことに基づいて、「正しい歌詞」に戻したのかもしれない。

それでも、ここでは別の解釈を提示したい。それは、おそらくこの歌の明るいイメージが、「労働歌」としての解釈を追いやってしまったためだろうと思う。ストライキやデモ活動などのいわゆる「労働闘争」も過去のものになってしまった。思えば、網引き歌⁷⁾や田植え歌⁸⁾、茶摘み歌⁹⁾などの労働歌が消えてしまって久しい。子守り歌でさえ、子守りをさせられていた乳母や姐やには労働だったことが、『竹田の子守り唄』の「この子ようなく 守りをばいじる(この子よく泣いて、子守りをいじめる)」という歌詞から窺い知ることができる。この歌も赤ちゃんを寝させるために歌っていたのではなく、寒い冬になかなか寝ない子をおぶって「子守りの仕事」をさせられている乳母が労働歌として歌ったのである。もはや、現代人には「労働歌」という概念がないのかもしれない。

その結果、現代では、この歌は「労働歌」ではなく、もっぱら「行楽の歌」として歌われることになってしまった。現代人のほとんどは牧場で労働したこ

とはなく、むしろ観光客として訪れる機会の方が圧倒的に多いだろう。この曲の明るい曲調からも、「辛い労働をしている若者の労働歌」というイメージよりも、「夏の休日に山麓の牧場にピクニックにでも行った時の歌」というイメージを抱きやすい。その結果、「山の牧場にピクニック行ったら誰かの歌声が聞こえてきた」という解釈が自然に受け入れられるようになったのだろう。さらに言えば、その歌声も労働者のものではなく、同じようにピクニックにやってきた他の若者グループの楽しげな歌声であるに違いない。歌詞の3番を無視してしまえば、2番の歌詞は「歌うのか」の方が「楽しい行楽の歌」には適しているのである。

IV. まとめ

YouTubeで「おお牧場はみどり」を検索すると、100を超える動画が見つかるが、みどり豊かな明るい牧場の風景ともに歌われるものばかりである。ピッチフォークという大きな農具で草を積み上げる労働(図3参照)をしている映像は見つからなかった。松本大学のある松本市のすぐ北に隣接する安曇野市では2019年まで「あづみ野うたごえ喫茶」という催しが行われていた。そのYouTube映像¹⁰⁾が残されていて、私と同世代(かそれより少し上、おそらく団塊の世代)と思われる参加者が「おお牧場はみどり」を歌っているものもあった。「うたごえ喫茶」「団塊の世代」ということで「歌の力」という歌詞で歌っているのではないかと期待したのだが、楽しそうに「歌うのか」のほうの歌詞を歌っていた。もうこの歌は完全に「労働歌」ではなくなったのだ。

さて、最後に残った疑問は、中田羽後の元々の作詞した歌詞がどんなものであったかであるが、その探究は私自身の老後のお楽しみとしようと思う。

注

注1

「アコーディオン好きの徒然日記(2)」というブログのコメント欄(<https://kikumasa1234.blog.fc2.com/blog-entry-337.html?sp&m2=res>)にMR.BONという人が以下のように記載している。(閲覧日2021.4.27)

濁点ではないけれど、別の曲でもうひとつ長年の間に間違っ歌われている歌詞が思い出されます。それは「おお牧場は緑」の2番で「おお聞け 歌の声 若人らが 歌うのか」という箇所です。しかしこれは少なくとも50年前の頃は「若人らが 歌の力」と歌われていました。なのに最近では多くの歌本は「うたうのか」が「歌の力：チカラ」よりも席捲しております。ご参考までにワタイは断固として「歌のチカラ」を推しております。

なぜそうなったのか？

ワタイの推理では、「力」という字がひらかなやカタカナの(力)や(か)の字に似ているため「若人らが うたの か」と早とちりして読んだ人がいて、「うたの か」では意味が通じないし不自然なので「うたウのカ」と「ウ」を間に挟んで辻褄を合わせ、ついでに漢字のチカラをひらかなの「か」に変えた末の過ちではないかと思われまふ。

注2

「5ちゃんねる」の「空耳アワー@懐メロ板」(<http://music.5ch.net/test/read.cgi/natsumeloy/1013319228/150>)の86番の書き込みに「『おお牧場は緑』の2番／おお聞け、歌の声／若人らが歌の力♪」とある。(閲覧日2021.4.27)

86：：02/04/05 21:34 ID:???

懐メロじゃないけど

「おお牧場は緑」の2番

おお聞け、歌の声

若人らが歌の力♪

の「若人ら」って意味がまだわからなかった頃

「わこうドラが歌の力」だと信じ、

「わこう」ってきつと、

エラく景気のいい音を立てるドラなんだろうなと

想像していた

注3

「5ちゃんねる」の「ちょっと恥ずかしい勘違い 思い違い9」の書き込み984(<https://medaka.5ch.net/test/read.cgi/kankon/1596105728/984>)を受けて、996に以下の内容の書き込みがなされている。(閲覧日2021.4.27)

984おさかなくわえた名無しさん2021/04/06(火) 20:18:19.66ID:tbeMt3vT

「おお牧場はみどり」の歌詞

「若人(わこうど)らが歌うのか」のところ

「ワコードラ(という名前の人)が歌うのか」だと思ってた

996おさかなくわえた名無しさん2021/04/11(日)

21:21:34.88ID:zHW+EZNx

>>984

今まで何故か「若人らの歌の力！」って歌ってた

自分が怖い

さらに、その書き込みを受けて、「ちょっと恥ずかしい勘違い 思い違い10」(<https://medaka.5ch.net/test/read.cgi/kankon/1618145870/>)でも、書き込み7に同様の指摘がある。(閲覧日2021.4.27)

7おさかなくわえた名無しさん2021/04/12(月) 09:45:15.11ID:RAwNB4Ff

前スレ>>996

>今まで何故か「若人らの歌の力！」って歌ってた

自分は「若人らが歌の力」と歌ってた記憶があったので思い違いかと思って調べたら「若人らが歌う力」という歌詞が存在していたらしいよ

注4

「のびの～び倶楽部－ヴァーチャルうたごえ喫茶のび」の掲示板(Googleのキャッシュ(<http://webcache.googleusercontent.com/search?q=cache:scy60VFdnZIJ:www.utagoekissa.com/cgi/yybbs/yybbs.cgi%3Fmode%3Dpast%26log%3D3%26page%3D20%26bl%3D0%26list%3Dthread+&cd=29&hl=ja&ct=clnk&gl=jp&client=firefox-b-d>))に、以下の様な記述も見られる。(閲覧日2021.5.7)

おお牧場はみどり エーちゃん－2009/12/22 (Tue)14:13 No.5442

(スレ #5437より)

>「おお牧場は緑」の2番。

>「おお聞け歌の声、若人らが歌う力」が、多くは「若人らが歌うのか」と何とも間抜けな歌詞になっている。

>1番の情景描写から、3番の仕事賛歌につなげていくところなのですから、若人らの歌声は力強くないとびったり来ないでしょう。

おお牧場はみどり

♩ = 106

作詞：中田 羽後
作曲：チェコ民謡



おおまきわはみどり、おおまきわはみどり、おおまきわはみどり、おおまきわはみどり。

ゆき がとけて、かわ となつて、やま をくだり、たに をはしるー

のき よこぎり、はた そうるおし、よび かけるよ、わた しに

サークルおけら

>思うに、「力」を「か」と見間違えた人が、編集原稿を作ってしまったのでしょうか。

そういう話は聞いたことがあります。

トミでかな、アハハ。

うちでは、「歌う歌」になってます。

どこでこの歌詞になったのか、ちょっと覚えがないのですが、多分、どなたかが掲示板か何かで指摘いただいたのだと思います。

でも、たしかに「歌」「歌」「歌」ってしつこいですね。

Re: おお牧場はみどり 一夜 紫 - 2009/12/22 (Tue) 22:18 No.5446

因みに、「緑の歌集」(昭和39年発行)などは、「歌の力」になっていますね。

Re: おお牧場はみどり エーちゃん - 2009/12/23 (Wed) 09:41 No.5449

うちの緑の歌集は1976年版なのですが、「のか」になっています。

Re: おお牧場はみどり muto - 2009/12/26 (Sat) 01:02 No.5467

うちの緑の歌集は、昭和37年印刷版でしたが、「若人らの歌の力」でした。しかもそこだけ、後から校正したような別活字になっていました。皆迷いに迷っているようですね。

注5 「うたごえサークルおけら」のウェブサイト (http://bunbun.boo.jp/okera/w_osanago/oh_makiba.htm)にある『+おさなご歌集+』(2016)の楽譜には、当該部分は「歌ううた」となっているのだが、楽譜には右図のように「うたのちから」と書かれている。(閲覧日2021.4.27)

注6 話を複雑にしすぎないために本文中では言及しないが、当該箇所之歌詞が「歌うのが」となっているもの(最後が「か」ではなく「が」)があったことも資料で確認できる。「なぜ余計な濁点」をつけたのかを考えると、「歌うのか」の「か」と「歌の力」の「力」も「点」のあるなしが違いとなっていることに気づく。当時のテレビの歌詞テロップは手書きであった。歌詞の最後の「か」にきちんと点を付けるのを忘れないよう指示されたテロップ担当者が「か」にまで「余計な点」を付けてしまったのではないだろうか。NHK放送のYouTube「小学生の子供たちの合唱(おお牧場はみどり)」(<https://www.youtube.com/watch?v=cSqU0Cv1Q78>)では、歌手の立川澄人らは「歌うのか」と歌っているが、テロップは「が」となっている。(閲覧日2021.4.27)

注7 あづみ野うたごえ喫茶(<https://www.youtube.com/watch?v=fnxqqangupE>)長野県安曇野市にある多目的喫茶ホール「ホワイトトークハウス」で123回以上も開催されていたイベント(閲覧日2021.4.27)「うたごえ運動」として、東京新宿を中心に全国に「うたごえ喫茶」が広がっていたことがわかる。

文献

- 1) 池田小百合, 「納得童謡・唱歌」(<https://www.ne.jp/asahi/sayuri/home/doyobook/doyo00sengo.htm#oomakiba>) (2008) (閲覧日2021.4.27)
- 2) 関鑑子(編), 『青年歌集(第四篇)』音楽運動社(p.43に歌詞が掲載) (1955)
- 3) 合田道人, 『日本人が知らない外国生まれの童謡の謎』祥伝社(p.24に歌詞が掲載) (2006)
- 4) 飯塚書店, 『緑の歌集』飯塚書店(p.29に楽譜と歌詞が掲載) (1959)
- 5) 竹内貴久雄, 『唱歌・童謡100の真実—誕生秘話・謎解き伝説を追う』ヤマハミュージックメディア (2009)
- 6) Wikipedia「おお牧場はみどり」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/おお牧場はみどり>) (閲覧日2021.4.27)
- 7) 「山口県の文化財：民謡概要(網引歌)」(<https://bunkazai.pref.yamaguchi.lg.jp/folksong/detail.asp?fid=051-022&pid=ss&svalue=&bloop=3&mloop=0&floop=36>) (閲覧日2021.4.27)
- 8) YouTube「白川郷で田植え祭り 早乙女の田植え唄響く」(<https://www.youtube.com/watch?v=pyLDcGTESI4>) (閲覧日2021.4.27)
- 9) 「宇治田原の茶摘み歌」(<https://ujitawara-kyoto.com/tea-song/>) (閲覧日2021.4.27)